船橋市議会議長賞

夢のある税

船橋市立高根台中学校
第三学年　平山　みづき

この作文を書くにあたって身近な税は何があるのかを考え始めたが、よくよく考えたら税とはどんなものなのか自体あまり知らないことに気がついた。生きていくうえで絶対に一度は耳にする「税」という言葉。私も何度も聞いたことがあり使っている。それなのに詳しく理解できていないことに驚いたが、思い返すと税について詳しく学ぶ機会がなかった。

一から学び直すと様々な気づきがあったが、一言で言うと「みんなのために使われるお金」だということがわかった。詳しくすると学校・交番・病院などの公共サービスを受けるときにかかる費用をみんなで出し合って負担しているということだ。私達は税に助けられながら生きている。考え方を変えれば、税を納めることで誰かの命を救う手助けができているかもしれないし、誰かの未来を守れているかもしれない。そう考えると税はとても夢のあるものだと思った。

ここで気になったのは、私がこの先納めていく税でどれぐらいみんなの役に立てるのかということだ。ついている職業や住む家、どんな暮らしをしているかによって納める税は大きく変わるので、私の生涯納税額はまだわからない。そのため、生涯年収をシミュレーションできるサイトで世の中の平均をもとに計算してみることにした。もし年収四百万円なら年間で約三十六万円納税し、二十三歳から働き六十歳で退職するなら生涯納めるのは約千三百四十万円になるそうだ。この金額からどれぐらいみんなの役に立てるのか考えてみた。税金の使われ方は様々で、どの使われ方をしても社会のためになっているが、今回は人助けをイメージしやすい医療関係に使われる税金で、そのなかでも救急車を何回呼ぶことができるかをもとに考えることにした。日本では一般的な救急車の利用は原則として無料なので、もし税金で賄われていなかったら一回の出動にいくらかかるのか調べたところ、約四万五千円かかることがわかった。これをもとに計算してみると、私の生涯納税額だとなんと約三百回呼ぶことができる。救急車が出動するということは人を助けに行くということなので、私は約三百人の命を救うことができるということだ。想像していたよりも多く驚いた。なんて夢のあるものなのだろう。

これは私の考えであり、回数も金額も正確な数値ではない。将来を想像して考えたものだ。しかし、税金を納めることで誰かの命を救う手助けができているのは確かだと思う。そして、誰かの命を救うということは、巡り巡って自分の命も救ってもらえるということである。何かあったときに誰もが安心できる日本にするために、私はこの「夢のある税」を納めていきたい。